

2024 年度 法政大学国際高等学校 学校自己評価報告書

法政大学国際高等学校は、2018 年度 4 月に法政大女子高等学校を発展させ、共学校としてスタートした。2024 年度は、国際高校として 7 年目となり、新カリキュラム実施に伴う「学びのデザイン」の完成年度であった。また、2023 年度に引き続き、コロナ禍で失われた学校文化を取り戻し、再構築を目指す 1 年でもあった。

そのまとめと振り返りにあたる「学校自己評価」について、2024 年度を総括する形で提示する。

教育理念・目標	教育理念 野上弥生子が示した「女性である前にまず人間であれ」の理念をさらに発展させ、＜主体的に学び、考え、行動し、多様な他者とつながる 21 世紀の地球市民(グローバルシチズン)を育てる付属校＞として、法政大学憲章の「自由を生き抜く実践知」を追求する。 教育目標 I. 「自立」「探究」「共生」する人間の育成 自立 ①主体的で自由な精神を持つ人格の育成(人格) ②主体的・能動的な探究姿勢の確立(学び) ③自律的・主体的な規範意識の育成と援助(モラル) ④自立的・主体的に生きる力の育成と支援(キャリア) 探究 ①知の創造の主体としての自己の確立(主体) ②自由な発想による探究心の育成と知的好奇心の喚起(探究) ③科学的な視点・論理的な思考能力の育成(論理) ④豊かで柔軟な感性・感受性の創造(感性) 共生 ①他者への豊かな想像力と自他の権利に対する意識の育成(想像力・権利) ②多様な価値観や文化への深い理解の育成(多様な価値観・国際) ③多様かつ論理的主張に基づく対話や話し合いによる相互理解の形成(民主的精神) ④寛容の精神の涵養(平和的共存) II. 5 つのスキルの獲得 具体的に各授業や各種の取り組みを通じて、次の 5 つのスキルの獲得を目指す。 ①思考スキル 論理的かつ創造的に考える力 ②コミュニケーションスキル 他者の考えを理解し、自己の考えをわかりやすく伝える力 ③ソーシャルスキル 対話を円滑に行い、知が集まる環境を整える力 ④自己管理スキル 課題の質・量を理解し、取るべき行動を適切に管理し実践する力 ⑤リサーチスキル 情報を管理・整理し、適切に処理し、また情報の正誤を判断する力
重点目標	① 「協同的な学び」を取り入れた独自の教育メソッドを確立する。 ② グローバル化に対応した多文化共生教育を展開する。 ③ 単位制カリキュラムを活かした半期科目など、授業の仕組みを確立する。 ④ IB コースを継続的に発展させるとともに、その教育方法をグローバル探究コースの学びに摂取し、「学びのデザイン」を具体化する。 ⑤ 妥当性と信頼性を持った評価方法の確立をはかる。 ⑥ 高大連携をさらに充実させ、より発展した研究や大学での学びを意識させる。 ⑦ 「国際高校」のミッションステートメント、ポリシーを刷新、修正し、理念の共有を進める。 ⑧ 自主規律の理念に基づいた主体的な生徒自治活動を促す。 ⑨ アドバイザー制を活かしたクラス運営を確立する。 ⑩ 海外大学進学を目指す生徒のためのサポートと情報共有の方法を確立する。 ⑪ 多様な交流と国際理解を目指した国際交流、姉妹校提携の充実をさらに図る。 ⑫ 現行の入試制度の在り方を確認し、選考方法、種類の妥当性の見直しと点検を行う。 ⑬ 柔軟な転入編入に向けた試験や選抜方法の検討を行う。 ⑭ 働き方改革に伴う現在の業務量の見直しと精査を行う。

共通課題

No.	評価基準	学校自己評価
		年度目標：現状と課題、具体的な取組
		年度評価：達成状況、次年度への課題と改善策
1	建学の精神 (建学の精神や理念の理解と意識化)	新入生オリエンテーション、各種ガイダンスを通じて、法政大学の建学の精神、ならびに本校の教育指針について学ぶ機会を設けた。法政大学憲章を学ぶための教材『学びのつながり』を活用した。 各科目の授業実践の中だけでなく、社会課題解決の探究プログラムである PASS 活動を通じ、多様な他者と協同して問題解決に当たろうとする精神を涵養し、実践知の大切さを伝えることに努めた。
2	組織運営	教科指導・生徒支援・進路支援・国際交流・入試広報がより専門的にそれぞれの課題に取り組む事ができるよう、総務主任、教務主任、生徒支援主任、国際部主任で運営委員会を構成。また、それに進路支援主任、入試広報主任を加えた 6 人で拡大運営委員会を構成。これらの運営委員会が学校運営の中核を担った。また、専門部署に配置された教員が、アドバイザー(担任)を兼ねる組織体制を通じて、教員と有機的にコミュニケーションを取ることができるよう生徒に提供できた。教育活動を機動的に行うことができる学内機構とすることで、「国際高校」の教育をさらに進めることができた。
3	教育活動 (教科、生活、進路、行事、自主活動等)	【教科活動】 一斉授業形式から脱却し、生徒自身が考え、対話、議論、発表するという双方向でアクティブな授業への転換をはかってきた。2022 年度入学生からは 3 観点別評価を導入し、本校が評価の基軸としておく「5 つのスキル」の評価と重ねて総合的に学習状況・到達度を評価している。 生徒自らが「問い」を立て調査研究し、自らの力で「答え」を求めようとする授業がより定着しつつある。 2022 年度入学生より開始した講座「地球市民」を中心に据えたカリキュラム「学びのデザイン」は、24 年度が完成年度となった。2 年次科目「地球市民Ⅰ」においては、前年度に引き続き、教科・科目を横断して世界の課題に迫る手法を学び、自身で問いを立てて考えることを実践できた。3 年次科目「地球市民Ⅱ」は、最初の

		開講年度であったが、個人の興味関心に基づく課題について探究を深め、その成果を「卒業エッセイ・研究・制作」としてまとめていく活動が展開できた。テーマ設定からリサーチクエスチョンを立てるまでの道筋について、先進的な方法をとる授業を教員間で見学したり、その成果を教員同士で共有したりすることで、新しいスタイルの学びをさらに充実させていきたい。 コロナ禍以降、全教員がスキルを向上させながら、必要に応じてオンライン授業やオンライン同時双方向型（ハイブリッド型）授業を行ってきた経験から、一層の ICT の活用が進んでいる。 【学びの点検】 前期・後期終了時に全学科・科目ごとに学習計画とその結果を分析し、次学期・次年度の学習計画策定に繋げた。また、学年末には全校生徒に対する「学びの振り返りアンケート」を実施し、学習状況とその質について把握した。 【国際交流】 研修旅行等の取り組みを拡充するとともに、ビデオ会議システムを活用したオンラインでの交流も活発に行った。 ・スウェーデン 姉妹校協定に基づく交換留学制度を利用して、クララ高校の 1 名の生徒が本校での長期留学を開始した（24 年夏～）。25 年 1 月にクララ高校から 6 名の生徒が来校し、約 1 週間、生徒宅にホームステイをしながら本校での授業に参加したほか、放課後や休日には禅や能などの日本文化を体験した。25 年 3 月には、約 10 日のスウェーデン短期研修を行った。参加した本校生徒は 10 名。 ・台湾 9 月 6 日、IB コースの 1 年次生徒が、台湾の東山高級中学 (Taipei Private Dongshan High School) と英語によるオンライン交流を行った。25 年 3 月には同校との交流を含む「台湾語学研修」を企画したが、催行最少人数に達せず中止となった。さらに、生徒への広報を積極的に行い、25 年度実施に繋げたい。 ・韓国 韓国の大邱にある松嶺女子高校 (SongHyun Girls High School) との交流を定期的に行った。 ・オーストラリア 4 月から 25 年 1 月まで、オーストラリアの生徒 1 名が本校で長期留学を行った。 ・スリランカ 8 月から 12 月まで、スリランカの生徒 1 名がアジア架け橋プログラムにて本校で長期留学を行った。 ・ベトナム（ハノイ） 8/28～9/5、アントレプレナーシップをテーマにした PBL (Project-based learning) の講座でベトナム研修を実施。18 名の生徒が参加。日本での事前学習を踏まえて、現地起業家との課題解決型学習に取り組んだ。 ・インドネシア（バリ） 8/24～8/28、PBL (Project-based learning) の講座「地球と私」でインドネシア研修を実施した。 以上の国際交流を通じて、参加生徒は異文化理解を深めたほか、探究的な学びを経験した。また、課題解決に取り組む人々の活動に触れることで、生徒たちが大きな刺激を得たことが、アンケート等からうかがえた。こうした国際的な交流や取り組みが本校全体の国際化の深化に繋がっている。 【生徒の実践報告・ワークショップ参加】 3 回目となる「国際教育プログラム成果発表会」は、主にグローバル探究コース 3 年次の講座「地球市民Ⅱ」、IB コース 3 年次の EE (Extended essay) の発表を保護者（保証人）のほか、一般の方にも公開して実施した。また、そのプレ大会として、3 年次生全員による「地球市民」もしくは「EE」の発表会を行った。生徒たちは、日本語や英語でそれぞれ実践報告を行い、外部の評価委員の先生方、本校教員や生徒からのフィードバックを受けた。これにより、生徒たちは自分たちの到達度と今後の課題を確認することができた。 【行事】 体育祭は昨年度の経験を活かして、運営方法を検討した。特に競技種目については生徒の実行委員を中心に新競技を考え、種目を充実させることができた。保護者（保証人）の入構については、時間帯・場所を限定しての観覧を可能とした。 文化祭においては、一般の方々に参加しやすい入場形態と、スムーズな入場を可能とする方法を構築した。工夫を凝らした展示や公演を行い、日々の活動の成果を外部も含めて広く発信することができた。 体育祭における関係者評価としては、生徒たちが主体的に運営を行っていることを教員たちが見守っている様子を評価する声があった。一方、生徒たちの取り組みに教員はさらにアドバイスをした方がいいのではないかという、保護者・保証人からの声もあった。こうした様々な評価をも視野に入れながら、教員と生徒で今後の体育祭について、やり取りを深めていきたい。 文化祭における関係者評価においては、体育祭と同様に生徒の主体的な運営になっている点が評価された。一方、保護者も一緒に楽しめる工夫や、入場の規制やパンフレットのあり方について要望が寄せられた。さらに、様々な人が楽しめる文化祭になるよう、これらの声を次年度に反映させたい。 【自主活動】 クラブ活動については、活動内容や活動場所について、生徒が主体となって調整を行いながら限られた施設条件の中で、活動を行っていた。教員は、必要に応じてアドバイスをしながら、生徒の活動を支援した。
4	安全・保健管理 （保健、安全、防災、施設等）	引き続き感染症に対する体制を取りながら、インフルエンザ、新型コロナなど感染症の対応を適宜、適切に行った。 衛生委員会を定期的に開催し、保健・衛生上の課題解決と点検等を行っている。 防災においては、近隣公立小学校・中学校と罹災者支援ネットワークを形成しており、ネットワークの役割分担の見直し、非常用物品の備蓄量・帰宅困難者の受け入れ可能状況などの情報交換を行った。また、非常用物品の備蓄量・帰宅困難者の受け入れ可能状況などを含めて情報交換し、模擬訓練等を行った。非常用簡易トイレ、電源の要らないストーブ、灯油、小型発電機、停電時使用可能な電話機、等に加えて、水：（全校

		生徒＋教職員）×3 日分、非常食：（全校生徒＋教職員）×3 日分、非常用毛布：（全校生徒＋教職員）分を備えている。
5	連携 （保護者、卒業生、地域等）	4 月、10 月（3 年次のみ）、3 月（1・2 年次のみ）に「教育懇談会」を実施して、保護者との連携をはかった。学習の実践と成果、課題を共有し、生徒や学校の状況に関する情報交換を行って、本校の姿勢や考えを保護者・保証人の方に深く理解していただくことができた。 PTA 総会は教育懇談会実施に合わせて久しぶりに対面で実施した。また、PTA 常任理事会も定期的に対面で行う形に戻して、教員組織との連携が一層深まった。 教育懇談会における関係者評価としては、対面実施が高く評価される一方、当日のスケジュールのタイトさや会場の狭さについて意見が寄せられた。次年度の実施の参考としたい。
6	大学との連携	法政大学との連携事業である「ウェルカム・フェスタ」、学部ガイダンス、「イングリッシュ・キャンプ」、PTA 法政大学見学会、小金井キャンパスでの「ワンデーサイエンスカレッジ」、多摩キャンパスでの「法大多摩キャンパス体験学習プログラム」等々、多くの活動が実施された。 2024 年 12 月 21 日（土）に、法政大学市ヶ谷キャンパスのスカイホールで「未来を切り拓く 総長杯 英語プレゼンテーション大会」が開催。三付属校の生徒が集まって日頃の学習の成果を競い合う取り組みで、24 年度は国際高校からは 1 チーム 2 名が参加した。 「高大連携講座」については、全 15 学部で実施することができた。受講した生徒（42 名）は意欲が高く、授業の質疑応答では活発な意見が飛び交うことも多かった。大学の「学問」の概要や諸課題へのアプローチの手法を知ること、生徒は視野を広げることができた。実践的な大学での「学び」を体感する場を生徒に提供する機会となっている。 3 年次に法政大学の特別聴講規定を利用した法政大学特別聴講には、3 年次生のうち 9 名が 6 科目において履修し、対面やオンライン（オンデマンドを含む）で大学生とともに学ぶ機会を得ることができた。大学での成績評価に基づき、生徒の学習成果を「学校外学修」の単位として認定した。早い段階から高次の学びに触れることで、受講した生徒は、いずれも、大学進学後の学びに対してさらなる意欲を示し、成長に繋げることができた。

付属校独自課題

No.	評価基準	学校自己評価
		年度目標：現状と課題、具体的な取組
		年度評価：達成状況、次年度への課題と改善策
1	授業改革	2020 年度に本校の主体的・協同的な学びのコンセプトを示す「学びのデザイン」を作成、それを具体化するカリキュラムを 2021 年度に策定し、2022 年度入学生から実施している。「Critical thinking」は、生徒の経験世界と科目の専門知とを関連付け、地球市民に必須の「思考の方法」と価値意識を学ぶための科目であり、1 年次の必修科目として実施している。PASS プログラムは、1 年次は「コミュニティプログラム」として実施。地域の課題に対するアプローチに取り組んだ。個々の興味関心をもとに課題を発見することを通じて、2 年次 3 年次の「地球市民」、卒業エッセイ・研究・制作につながるものになった。2024 年度は、初めて 3 年次の全生徒が卒業研究を完成させた。「国際教育プログラム成果発表会」や「教科作品集」にその成果をまとめたり、発信したりすることができた。評価方法の改革も着実に推し進めてきた。3 観点による評価基準だけでは学習者の総合的な学びの力を測ることはできないため、本校独自の「5 つのスキル」に即して、各スキルの獲得・向上を目指した授業・活動を実践し、生徒を総合的に評価している。生徒に対しては事前に各科目における「5 つのスキル」の内容、評価基準を示し、それらを理解した上で日々の学習に取り組めるようにもしている。評価機会・評価方法の多様化は一定程度推し進められ、レポート課題による評価も多くの授業で取り入れられるようになった。一方、文章生成 AI の生徒への学びの影響も大きく広がっている現状があり、生成 AI と学びとの関係をどう考えるか、さらなる評価方法の開発と研究が必要である。
2	単位制・クォーター制導入に伴う改革とその進歩	4 学期制導入に伴う、各学期の開始と終了時期について、さらに検討を重ねて、大学入試などにも支障なく対応できる日程の設定をおおよそ固めることができた。今年度より開講した 3 年次の講座「地球市民Ⅱ」は、「地球市民Ⅰ」で獲得された視点やスキルと有機的に関連して、本校での 3 年間の学びの集大成となる取り組みになった。 単位制での授業実施により生じる生徒個々の空き時間の活用については、自習スペースやグループ学習のスペースの拡充、適切な空間の確保など、環境の整備を行っている。 単位制により生徒は自身の進路と結びつけて科目を選択し、自由な時間割を作成することができる。一方で、卒業時の進路実現だけを目指し、その先の学びや生き方に必要な科目、より難易度の高い科目の選択を避ける生徒もみられ、自由な科目選択の中で、より質の高い学びを追求する生徒層を増やしていくこと、そのための仕組みを作り出していくことは、引き続き課題である。「地球市民Ⅱ」の講座選択の際には、科目登録と同時に研究テーマ選択につながる課題を課すことで、卒業研究を行う講座を自身の興味関心に基づき選択することができるような仕組みとした。
3	異学年クラスター・アドバイザー制を活かした生徒支援	異学年クラスター制は、異なる学年の生徒が共に生活することを日常のものとしている。また、生徒が必要に応じて相応しい集団を構築し、活動する力を育てる大きなきっかけになっている。 アドバイザー制は、生徒が教員から自立し、自ら探究心を育てていく仕掛けにもなっている。アドバイザー教員の生徒との関わりについては、生徒の自立支援により適切に機能する体制を構築していくことが、引き続き必要である。生徒が主体的に考え、行動していくためには、生徒同士および生徒と教員が対話してともに考える学校文化の更なる深まりが望まれるが、アドバイザー教員の関わりについては、様々な改善を図ってきた。
4	国際高校ミッションステートメント・ポリシーの改定	2024 年度、ミッションステートメントとスクールポリシーの改定は行わなかった。 2023 年度で課題としていた「日本語・英語の併記」は引き続き課題となっている。

5	国際化に伴う環境整備	留学生／留学希望者の支援を目的とした「国際ラウンジ交流会」や、国際交流の場である「国際交流スタッフ」が、Google クラウドをプラットフォームでの活動を継続した。また、研修旅行で来校したクララ高校生徒の歓迎会、長期留学から帰国した生徒による「留学生座談会」を実施。これらの取り組みを通じて、高校在学中、または高校卒業後における海外留学のモチベーション喚起を図った。
6	自主活動の活性化	現在の生活時間帯・異学年クラスター体制の中での自治活動のスタイルを形成しつつある。今後、生徒会が HR の時間を有効に活用することにより、さらに自治活動が発展することが期待できる。また、異学年クラスターの特性を活かした、自主性・主体性を育むプログラム開発の改善については、教育理念に基づく検討と実施が重要な課題である。活発化しつつある有志活動の整理と援助も、学校としての今後の課題である。
7	入試広報改革	① 広報活動 急速にオンラインの利用が普及し、受験生の中にもオンラインを利用した情報収集を求めている層がますます増えている。そのため業者の主催するオンライン入試イベントに積極的に参加したほか、9 月と 11 月には国際高校独自のオンライン説明会も実施した。9 月はオレンジ祭をきっかけに本校に興味を持った受験生に情報を提供したほか、11 月は入試本番直前に開催することで、志望校を決めるにあたり時間的余裕がない受験生に好評であった。また海外に向けての情報発信はオンラインが効果的であり、海外生向けの入試イベントに積極的に参加している。 オンラインでの情報発信に対応する一方で、各種入試イベントに積極的に参加し、対面による広報にも力を入れている。受験生からは抱えている疑問や不安を、本校教員と対面で話すことによって解消することにつながったと好評であった。また、海外の日本人学校や学習塾の入試イベントにも参加した。 本校で開催する学校説明会は、実際に学校の施設を見学し、さらに本校教員と個別相談することができる行事として欠かせない。案内係として手伝い生徒を配置しており、受験生からは本校生徒と直接話すことができ、好評だった。 本校の理念や特色への理解と賛同を広げるために、教育活動を直接的に実感できる工夫など、さらに広報改革を進める。 ② 入試活動 受験生が持つ様々な力を評価し、多様な生徒を受け入れるために、多種多様な入試を実施している。A 書類選考では中学校での日々の学習で優秀な成績を修めている生徒、B 学科試験では英数国の 3 教科において力を発揮する生徒、C 思考力入試では従来の学力基準では計ることが難しい思考力を持った生徒、D 帰国生・海外生入試では海外での経験を持って本校で活動する生徒、E IB 入試(自己推薦)ではディプロマ取得に強い関心を持つ生徒である。入試ではそれぞれの特徴を積極的に説明し、受験生にとって魅力的な制度になるよう努めている。 また、学内に転編入希望者を受け入れる余裕がある場合は積極的に転編入試験を実施する方針であり、今年度は、7 月に IB コースで 24 年度 1 年次生転編入試験、25 年 3 月にグローバル探究コースで 25 年度 2 年次生転編入試験を実施した。
8	国際交流活動の活性化	前年度の学校評価では、「模擬国連や英語ディベート大会等の、校外で行われるイベントへの参加の促進」が課題となっていたが、24 年度は、生徒の希望により模擬国連同好会が発足し、AJEMUN 主催の全国高校生教育模擬国連に 16 名の生徒が参加した。 また、二中高でのタイ文化セミナーへの参加や、カリフォルニア研修に参加した生徒による研修報告会の実施、さらには、トビタテ！留学 JAPAN 留学生によるエヴァンジェリスト活動など、国際交流活動の周知の活発化を行うことができた。今後もさらなる様々なイベントへの参加を促し、引き続き生徒に活躍の場を提供したい。
9	IB コースについて	24 年度(N24)は、IB 最終試験で半分以上の生徒が IB ディプロマを取得した。合格者の平均点は世界平均を上回ったが、学習に課題を抱える生徒の支援や助け合うクラスづくりが今後の課題となった。また、次の課題を引き続き残している。 以下の 5 項目は引き続き課題となる。 (ア)IBDP 取得の価値を踏まえた、付属校としての IB コースを展開する魅力の先鋭化 (イ)3 年間で IB の学びを完成させるための学習指導ロードマップ作成 (ウ)IB プログラムの基本設計である教科を超えた学びの深化 (エ)IB コース運営に必要な中期的な視点での教員の配置の検討 (オ)中学生対象の体験授業実施など、IB コースについての入試広報の強化 IB 生徒 1 名が、統計データ分析コンペティションで「統計活用奨励賞」を受賞した。社会とのつながりの中で学ぶ IB 教育の成果の一つと見ることができよう。また、CAS 活動においては、生徒が自主的に企画した、他校との協働や交流を実施した。今後とも学校外で生徒が活躍する場を紹介し活動を促したい。 なお、下記のような国・大学への進学についての情報を生徒に提供し、海外大学進学情報提供の取り組みを強化することができた。 ● ヨーロッパ留学フェアの実施 ● チェコとハンガリーの医科大学の紹介 ● オーストラリアの大学進学についてのガイダンス ● ミネルヴァ大学アンバサダーによる説明会 ● 韓国延世大学入試担当者の来校および生徒との懇談